会員だより

「農的社会の創造めざして」

昭和46年卒　蔦谷　栄一

この10月に農林中央金庫で25年、（株）農林中金総合研究所で17年の勤務を終え、あらためて11月に農的社会デザイン研究所を立ち上げました。組織を卒業してもうひと踏ん張りするつもりです。

振り返ってみれば戦後のベビーブームに生まれた我々団塊の世代は実に恵まれた環境を生きてきました。青田刈りでの就職、売り手市場で引く手あまたの中で就職先はよりどりみどり。就職してからは毎年のベースアップで、所得はうなぎのぼり。当たり前のように結婚して一戸建てを取得し、組織での経費も潤沢。退職金に加えて年金もしっかりともらって、老後の生活に不安なし。日下の関心は、旅行とゴルフと孫の成長というのがあらかたのようです。まさに高度経済成長の恩恵をたっぷりと享受してきたといえます。

これに比べて今の若い人たちは、厳しい就職戦線の中で、正社員の地位を確保することすら難しく、過剰労働に対しての低賃金。結婚することもままならず、老後のことなどまして考えられない。かつて高度経済成長の時期が日本にあったことについての実感はなく、先行きを考えれば現状に満足し、現状維持が一番というのが実情といいます。

あまりに大きすぎる世代間ギャップであり、特にバブルの形成と崩壊、90年代以降の金融資本主義の台頭・浸透、これと併行してのグローバル化で、日本経済はすっかり様変わりしてしまいました。団塊の世代は総じてこれをうまく切り抜けた一方で、そのあおりは若い世代に押し付けられることになり、あわせてコミュニティの貧困化、地域の活力低下等々、次世代にあまりにもたくさんの負荷を残すことになってしまいました。

団塊の世代が未来への責任を果たしていく前提として、今、経済大国から成熟国家への転換、工業的社会から農的社会への転換が求められているように思います。長年の社会経験を経て〝世間は変えられなくても地域を変えられる可能性はある。地域を変えることが難しくても自らを変えることはできる〟と考え、また自らを叱咤してもいます。まずは食料・エネルギー・介護福祉等を極力足元で自給していく。このための地域活動の展開と調査研究・情報発信、各地域活動のプラットフォームづくりを農的社会デザイン研究所は目指しています。ホームページ〈http://www.nouteki-design.com/〉もオープンしました。是非ご覧ください。

釣り上げたイワナを上手にさばき、はらわたを出している子供たち